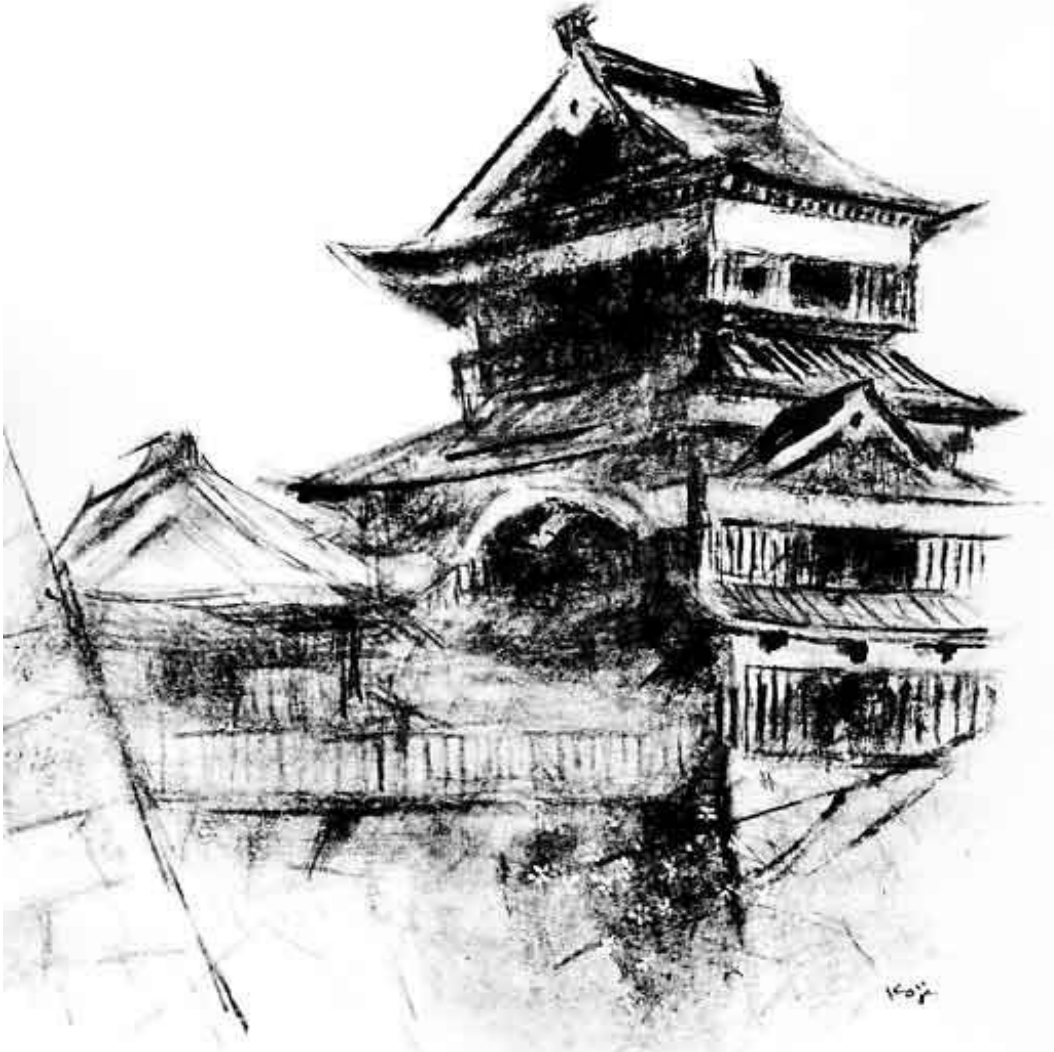
昭和43年7月1日第3種郵便物認可
平成16年5月5日発行（毎月5日1回発行）
第44巻5月号（通巻538号）

風土

5



PDF 制作　　俳誌の salon

醍醐の桜

神蔵器

三月や天に欅の力瘤

鳥交るまさをき空を撓はせて

くわんおんの衣ずれの音リラの咲く

鶯や法然院をつつみこむ

がうがうと芽吹く幽さに寝釈迦かな

石ころのみな賢くてクロッカス

春の夜の村を出てゆく道一本

初蝶生る正三角形ひもとけば

大黒の二重瞼に山桜

墓に摘む土筆を墓に供へけり

うすうすと白魚遡(のぼ)り桜咲く

涅槃図を芯に醍醐のさくらかな

竹間集

同人作品

辛夷咲く

蓮尾あきら

しばらくはたどりてありし春の夢
雲一つ真上にとどき良寛忌
涅槃図を大きくおろし山の音
言ひたくて砂でつぶやく春の潮
波うちの波にあそびの桜貝
待ち伏せて乗込鮒をすくひけり
みちぐさもときには大事辛夷咲く

二月尽

鈴木とおる

椿咲く島より白衣観音像
亡妻へ
墓山の空の眠たしいぬふぐり
堰音の高まり来たり水温む
立ちて飲む野焼じまひの茶碗酒
山焼の炎の結び目に風生れ
日蓮の俎岩に春の潮
吾に余白残す位牌や二月尽

水温む

外川　玲子

春一番接骨院の忘れ傘
方丈に轆轤部屋あり水温む
崖椿落ちて浄土にしたがへり
雛飾る指より昏れて母遠し
風向きのままに果てたる野焼きかな
天涯にあさきゆめみしいぬふぐり
柳橋左衛門橋や二月逝く

竹間集作家特別作品

有　楽　椿

― 門伝　史会 ―

名の椿うはさに訪ひし春時雨

ものの芽や特別公開門跡寺

廻廊のゆるき勾配紅椿

御水尾帝御手植ゑ佗助一つ咲く

等持院　三句

有楽椿庭の要に咲き継げり

馬酔木咲く上段一畳貴人席

有楽椿ひろふ指先ときめきて

兼好も聞きし黄鐘水温む

石庭に波音はるか牡丹の芽

木の芽風龍安寺垣の内と外

方丈に梅の香りの通りけり

北野天満宮　四句

紅白の鈴の緒鳴らす梅花祭

梅が香や勅使の木履歩ましむ

梅園と川隔てたる「御土居」かな

下萌や土蜘蛛の塚尋ね当つ

夕東風やしるべ小さき五条坂

商ひて通さる雛の目と合へり

灯の入りてかんばせ緩ぶ内裏雛

春の暮六道の辻黄泉路めく

京の灯のホテルへ帰る朧かな

山河集

同人作品

神蔵　器選

檜垣文の信楽焼に白椿　中村洋子

声かけらる尼僧にバレンタインの日

正面の青竹籠の白椿

アスファルトの道の途切れて蕗のたう

春うらら太極拳の手足伸ぶ

郷愁の越の雪野に来たりけり　池田加代子

春浅し佐渡の茅屋の能舞台

残る雪鬼太鼓（おんでこ）の待つ島開き

早春の抛物線の由比ヶ浜

明月院やぐらより声春近し

大屋根の卍の一字牡丹の芽　川井政子

多摩川に東歌あり風光る

春の鴨名城乱世くぐり来し

春日影まとひて松本手毬かな

晩年の晶子の歌集冴返る

蕎麦掻や母の齢を一つ過ぎ　石井悦子

大安の二月一日雨一日

菜畑を少し隠せる春の雪

まだすこし此の世にゐたき牡丹の芽

三月の花屋にひかり溢れけり

薔薇芽吹く十番館に陶の椅子　小林和子

余寒なほ抽斗の種思ひ出す

日の転ぶ傾斜二十度蕗の薹

枇杷咲いて三分の漁の網を干す

大仏の御身を透す余寒かな

風土独語／神蔵　器

ソプラノの楽譜となりぬ冬木の芽　　保田英太郎

冬木の芽は寒い冬に耐えられるように鱗片でおおわれているが、すっかり落葉した後は次第に充実し、ふくらみを持って来る。そして、この句の蕾は、さらに大きくふくらんで鱗片の先端が割れ淡い緑がぽっつりとのぞく、そんな冬芽ではなかろうか。

この句の秀れているのは「ソプラノの楽譜」の「ソプラノ」である。ソプラノは申すまでもなく女性の（男児の声にもいう）最高声域である。冬木の芽は一つ一つがエネルギーの凝集、いのちそのものであり、希望なので、音声で言えばまさに最高ソプラノの声域である。

これは冬木と作者が同じ位置に立っているからで、冬木の芽の生命の尊さ、健気なまでの努力が感動となり、冬木へのいとしさが、作者の心に高く澄んだ美しいソプラノ歌声のように聞こえて来たのではないか。

交代の車掌降り来て梅仰ぐ　　柴田　久子

この句の交代の車掌は、路線バスの車掌さんではなかろうか。もっとも路線バスはワンマンカーになって車掌は乗務していないバスが多いから、路線バスと限定しなくてもよいかも知れない。

何れにしても一と乗務が終わって車掌は交代した。乗務から解放された車掌は、車庫かバス停の近くにある梅の木のもとにまっすぐ近づき仰いだ。出発した時より花は大分開いて匂うばかりに美しい。ほっとした安堵、安らぎの一と時である。

あたたかや子が金槌を借りに来て　　生田恵美子

「ママ、金槌貸して！」

お母さんは一瞬自分の耳を疑った。子供だ子供だと思っている間に子は育っている。子供が借りに来たものが金槌で、大人の考えによっては危険な道具であったり、物騒なものであるが、この子にとっては自分の身辺のことは自分でする過程の一つの道具でしかない。恵美子さんは「気をつけなさいよ」とだけ言って、何も聞かず金槌をお子さんに渡したことであろう。「あたたかや」の季語がすべてを物語っている。

立子忌と思ふ銀次の忌と思ふ　　林　裕子

星野立子さんは、昭和五十九年（一九八四）三月三日、雛の日に亡くなられている。虚子の次女として生まれ、環境と才能に恵まれて「玉藻」の主宰として女流俳句の位置を不動のものにしたばかりでなく、今日の女流俳句の隆盛をもたらした。その人の忌日が雛の日であるのも劇的である。

銀次忌は高橋銀次さんの忌日で、平成十三年（二〇〇一）三月三日に逝去されている。私がこの句に注目したのは、「立子忌と

思ふ」と「銀次忌と思ふ」と二者を同じ形式で同じ重さ、たたみかけるように表現していることである。しかしこれは三月三日の雛の日に立子さんの忌日を思い出すことによって、銀次忌を思い出すといったものではないし、まして両者を比較対照しているわけでもない。

横浜句会は銀次さんが最後まで出席していた句会で、温厚な人柄、発表される優れた作品、選評の正しさなど出席の会員から尊敬され慕われていた。まさかあのように早く亡くなられるとは誰も思っていなかった。銀次さん自身でまとめたい仕事のテーマをいくつも持っており、入院中もあと十年は生かして欲しいと願っていたのに……、どれほど残念に悔しいことであったろう。

銀次さんが逝って三年、月一回の横浜句会に、裕子さんは庭に咲いた季節の花（先月三月には信楽の小さな壺に白の佗助）を毎月もって来てくれる。一と月も欠かしたことがない。裕子さんは何も言わないので解らなかったが、それは総べて銀次さんへ供えていたのだ。

文豪のベンチの会話水ぬるむ　　手塚　久子

この句の文豪のベンチは、東大の三四郎池に臨むベンチである。現在のベンチはおそらく何回目かのベンチであろうが、文豪のベンチといえば、まず夏目漱石が思い浮かぶ。

漱石がロンドンから帰国したのは明治三十六年（一九〇三）の一月で、四月から東大英文科、第一高等学校講師になっている。やがて虚子にすすめられて「ホトトギス」に「吾輩は猫である」を掲載した。

明治四十年（一九〇七）に漱石は「虞美人草」、この頃は旭新聞社に勤めている。ついで「三四郎」「それから」「門」の三部作を書いている。

もう一人の文豪といえば森鴎外になろう。鴎外が「舞姫」を発表したのは明治二十三年（一八九〇）、「雁」が一九一一年九月から十三年五月まで「スバル」に連載されている。二人の文豪の活躍した時代は符合するのだ。しかし三四郎池のベンチでの漱石の会話の相手が誰なのか、調べれば解ることと思うが、今、私のところでは断定はできない。

作者は早春の一日、本郷菊坂あたりに樋口一葉の足跡を尋ね、一葉の世界に浸りながら、天気も良く暖かであったので、東大の構内をぬけ三四郎池まで足を伸ばしたのであろう。そこに文豪が会話をしたというベンチを見て腰掛けたのだ。文豪のどんな会話が聞こえてきたのだろうか。池の水もすこし濁ってやわらか味を増してきたようだ。

寒造糀に聴かすモーツアルト　　潮　伸子

クラシックの好きな長嶋さんのリハビリにリラクゼイション・クラシックのCDを流しているとか、人間の精神と肉体に音楽の効果のあることはずいぶん以前から立証され、また乳牛なども音楽を聴かせると乳の出がよくなると聞いている。しかし糀にモーツァルトを聴かすと糀の発酵菌が活発になり、よいお酒が出来るのであろうか。さしずめモーツァルトであったら、ピアノ協奏曲第二十三番、第二楽章アダージオなどの繊細、優美な曲であったらお酒を飲む前に酔ってしまうであろう。

風土集

神蔵　器選

ソプラノの楽譜となりぬ冬木の芽　横浜　保田英太郎

子等跳んで渡れる川や犬ふぐり

読みさしの雑誌閉づれば冴返る

回廊を転がり弾む紙風船

山門を入ればつらつら椿咲く

初句会清記に力たしかむる　東京　柴田　久子

寒明けのめし屋の奥に鯛泳ぐ

交代の車掌降り来て梅仰ぐ

わが影を啄む鳥や梅日和

梅匂ふ寺領の闇のおそろしき

杭の頭の波かぶりたる雨水かな　津山　生田恵美子

黄砂降る中国展の紅の菓子

あたたかや子が金槌を借りに来て

風向きに厩の匂ひ初雲雀

囀や卒業証書筒に古り

窯変に挿すも一休椿かな　東京　林　裕子

立子忌と思ふ銀次の忌と思ふ

一寸を余す生涯紙雛

ゆふぐれの刻はなやげり牡丹の芽

まんさくや畦の十字に縄置かれ

文豪のベンチの会話水ぬるむ　横浜　手塚　久子

うたかたの消えかつ生れ池温む

日脚伸ぶ「ラストサムライ」奥深し

忘れずに梅咲きにけり空碧く

剣道衣軒に武道館寒明ける

空に浮く春の円型スタジアム　調布　川井　政子

きさらぎや奥行深き仏具店

春一番サラダにすこし酢を効かす

国宝の天守仰ぐや雪解風

吹き抜けの月見櫓や牡丹の芽